MMモードでは？

雑味がない大吟醸酒の味わい。スピード感があって鋭くスイングする。ベースはあまりゴリゴリとこないが、痩せているわけではない。切れ味で勝負している。

EAR 88PB

アナログレコードを愛してやまない設計者のティム・デ・パラヴィチーニの意向もあってEARは4種類もフォノイコライザーを製造している。88PBは定価二百万円を超える管球式プリアンプの最高峰EAR 912のフォノ部を独立させた製品。これはマンレイのチノックと同じパターンである。決して安価ではないが、お得ではあるのだ。

EAR 88PB ¥723,450
同ブランド製プロ用プリアンプEAR 912からフォノステージを独立させた、管球式フォノイコライザー。出力段には真空管PCC83を4本採用。搭載されるMC昇圧トランスはティム・デ・パラヴィチーニ自らが手巻きでデザインしたというオリジナルのものだ
問ヨシノトレーディング☎050-3375-3975、0533-75-6306

●入力端子：RCA×2 ●出力端子：RCA or XLR×1（スイッチ切替式） ●入力インピーダンス：47kΩ（MM）、4Ω or 40Ω（MC、出荷時指定・内部切替式） ●出力インピーダンス：60Ω ●感度（MM）：2.5mV（1V output） ●SN比：68dB（ref. 2.5mV） ●RIAA 偏差：±0.3dB ●大きさ：235W×100H×290Dmm ●重さ：6kg

ボリュームコントロールを装備。ダイレクトにパワーアンプに接続して使用することもできる

音の濃さでは定評があり、僕が愛用している834Pと比べるとさらにもう一段二段も濃密な音（価格差からいって同じはずはないが）。よく沈み弾むベースはその出方が違う。細かい音を吟味し重ねながら達成した成果というより、音楽を楽しく聴くのはこういうサウンドであるべしといったポリシーが大前提にあり、それをヒアリングによって具現化した感じがする。「ジェニファー」の声は**妖艶な色気がムンムン**で情熱的。すっかり手玉に取られ骨抜きにされてしまった。なお、ゲインのコントロールやパワーアンプ直結ができるようにボリュームが付いている。

MMモードでは？

MCと同様に厚手の音に魅了されてしまうが、厚ぼったいような局面もある。ドライな、素っ気ない音のカートリッジがいいのかもしれない。

試聴を終えて――ひとことで言えば「激戦」

試聴後の感想をひとことで言えば「激戦」。当たり障りがなくて情けないのだが「値段が手頃で音もいい、これが一等賞」を選びきれない。僕はわりとずけずけ書きたいほうだけど、今回はちょっと無理。ただまあ、「みんなそれぞれいいよ」的ナマぬるいまとめ方では、バイヤーズ・ガイドにならないので印象に残ったモデルを短いコメントで紹介したい。

まずはコストパフォーマンスが強烈に高いプライマー R32。もし2台買ってモノブロックで使ったらすごいことになるなと本気で思う（モノ仕様に切り替えられるわけではありません）。フェーズメーション EA-3Ⅱとオーロラサウンド ヴィーダは、このクラスのいいライバル関係になっている。エネルギッシュなEA-3Ⅱ、情報量が多いヴィーダという側面がうっすらと見える。同じ国産でもアキュフェーズ C-27は、ソフトを選ばずその対応能力が高い。カートリッジにも同様なことが言える。また赤裸々なソウルノート ph1.0と緻密なエアータイト ATE-2の音も忘れがたい。

海外製ではマンレイ チノック、パス・ラボラトリー XP-15、EAR 88PB。3つをまとめてしまうのは短絡的だが、共通項としてデジタルソースでは体感しにくい、濃さ・厚み・深みに惚れ惚れした。特にEAR 88PBはまさにグラマラス。一泊といわず、あと何泊かしていって欲しかった。